



枝廣 淳子氏

プロフィール
京都市生まれ。東京大学大学院教育心理学専攻修士課程修了。環境関係の通訳、翻訳、執筆および講演活動、コンサルティング等。日常の活動を通して得られる地球環境の現状や各地での動きなどに関する情報や知見をメルニュース等で広く提供している。
2002年8月、日本の環境情報を英語で世界に発信するジャパン・フォー・サステナビリティを立ち上げ、共同代表。
著書に「いまの地球、ほくらの未来〜ずっと住みたい星だから」等。



基調講演

テーマ「地球と水と私たち」

えだ ひろ じゅん こ
講師 枝廣 淳子氏(環境ジャーナリスト)

人は水を“食べて”生きている

私たちは水やお茶、ジュースなど、いろいろなかたちで1日に3~4リットルの水を飲みます。さらに私たちは、たくさんの水を“食べて”います。たとえば、1杯の牛丼。ご飯300グラムを作るため、1000倍=30リットルの水を使います。牛肉を作るには肉の7倍のエサが必要で、エサを作るために1000倍の水を使うので、牛肉100グラムを作るには7000倍=700リットルの水が必要です。つまり牛丼1杯で、約730リットルの水を食べているのです。こうして私たちは1日約2000リットルの水を食べます。しかも食物の60%を輸入している日本は、目には見えないけれど、外国の水を大量に食べているのです。

世界には水の足りない地域がある

“水の惑星”と呼ばれる地球。豊富に水があるようですが、海水ではない真水(まみず)・淡水(たんすい)は水全体の2.5%ほど。しかも私たちが実際に使えるのは淡水の0.8%。地球にある水がバケツ1杯とすると、人が使えるのは小さなスプーン1杯分くらいです。日本では水道をひねると、いつでも水が出ます。でも世界の多くの人にとって、それは夢のような話…。世界では5人に1人が安全な水を飲めず、汚れた水を飲んだ子どもが8秒に1人死亡んでいます。世界には水の足りない地域がたくさんあるのです。

かけがえのない地球の水を未来へ

水はぐるぐる回りながら、終わることのない旅を続けています。雨や雪となって降り、川にそそぎ、海へたどり着く水もあれば、地下にしみてわき水や地下水になるものもあります。やがて太陽の光で海や川の水が蒸発して雲になり、雨になってまた降ってくる。このひと回りを1年間に40回ほど繰り返すそうです。そして地球には、今ぐるぐる回っている水しかありません。地球の外から新しい水が来ることはないのです。みなさんの子どもや孫も、この水をずっと使っていくことになります。どこか途中で汚したら、ずっとその汚れが残ります。だから水はムダなく大切に使い、そして汚してはいけないのです。

ちょっとぐらい…は地球には大変なこと

だれでも「ちょっとぐらいいいかな」と思うことがあります。ちょっとぐらい川にゴミを捨ててもいいかな？ ちょっとの間なら蛇口をしめなくてもいいかな？ でも、このちょっとぐらいが、たくさんになると大変なことになります。「自分1人ならいいや」なんて思わないでください。たくさんの人が住んでいる地球にとっては、ちょっとのことではないんだと考えて、水とつきあってほしいと思います。